

発表の目的

本発表では「愛知県における立山信仰」を扱う。立山信仰を加賀藩領外における信仰を研究する上で一目置かなければいけないのが、愛知県と言われている。信仰史の研究活動を形成してきたのは主に芦峯寺宿坊家の出自を持つ佐伯氏である。文献史料上では、慶長9年(1604)の日光坊所蔵の断簡文書が加賀藩領外における檀那場の形成を示す初見の史料である。しかし、愛知県における立山信仰に関する調査や報告が盛んになされたのはおよそ10年前にさかのぼる。愛知県での研究はまだ途上であり今後の史料次第ではまだまだ進展の余地が大いにある。そのため、慶長9年の日光坊文書と先行研究を介した富士信仰研究の成果を引用しながらこれまでの研究で明らかになったことを論ずる。

本発表の構成

- [1]立山信仰とは
- [2]立山信仰研究の現状と問題点
- [3]慶長9年日光坊断簡文書
- [4]まとめ

[1]立山信仰とは

富山県郷土史研究者の1936年に草野寛正氏が『立山姥堂の行事考』で「立山信仰」と呼んで以来、越中国立山の神仏に関する信仰を「立山信仰」の研究用語で呼称されてきている。立山開山縁起（以降縁起）によると701年佐伯有頼が白鷹の不動明王と黒熊の阿弥陀如来のご神託により開山したと現在まで伝えられる。日本古来の神道思想と外来の仏教思想が交わり神仏習合となって立山信仰の外郭が形成されたといわれる。

大宝元年の慈興上人（佐伯有頼の出家後の名といわれる）による立山開基以来、魂を清めるために立山に登り、地獄のような地形を通過することは、一部の熱心な信者だけが行う特別な修行であった。しかし、1600年代に入ると、立山巡礼はより広く知られるようになった。平和で豊かな時代になり、巡礼に必要な時間と資金を持つ人が増えた。また、宗教的な旅は庶民に許された数少ない旅行形態でもあったとされる。

立山の「地獄」の話や、その浄化の力は多くの人々の共感を呼び、巡礼者の増加は立山信仰をより大衆的な方向へと発展させた。麓の芦峯寺や岩峯寺の集落には、数十軒の宿坊が建てられた。これらの宿坊は寺院や僧侶の住まいとしても機能し、巡礼者の心の旅に重要な役割を果たした。立山曼荼羅と呼ばれる精巧な絵画は、信仰の教義を一般の人々に説明するために制作された。曼荼羅は立山信仰を広める役割も果たした。各宿坊は布教のために特定の地域を指定され、立山曼荼羅は持ち運びに便利な巻物に描かれ、僧侶が教義を伝えるのに役立ったとされる。

[2] 立山信仰研究の現状と問題点

立山信仰の芦峯寺衆徒による配札活動の研究史は以下の通りである。

- (1)佐伯立光「立山芦峯寺史考」（立山寺、1957年）
- (2)佐伯幸長『霊峰立山』（立山開売鉄道株式会社・富山県立山鎮座雄山神社神光会、1959年）
- (3)橋本芳雄「信州と越中との信仰の交流 特に松本町立山講について」（『信濃』第14巻第1号所収、1962年）
- (4)佐伯立光『立山史談』（大用堂、1965年）
- (5)高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』（角川書店、1969年）
- (6)佐伯立光「配札檀那廻りについて」（『立山地区民俗資料緊急調査報告書』所収、富山県調査委員会、1969年）
- (7)長島勝正「衣・食・住」（同上）
- (8)佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、1973年）
- (9)佐伯立光『立山における登山の歴史』（富山県、1976年）
- (10)高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』（名著出版、1977年）
- (11)日和祐樹「立山信仰と勧進」（高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』所収、1977年）
- (12)寺口けい子「芦瞬寺善道坊諸国檀那廻りの実態」（『富山史壇』第67号所収、1977年）
- (13)佐伯立光「立山僧徒の布教活動」（『立山町史』上巻所収、1977年）

- (14)高瀬重雄『立山信仰の歴史と文化』（名著出版、1981 年）
- (15)寺口けい子「立山信仰と布教活動」（『富山県史』通史編VI 近世下 所収、富山県、1983 年）
- (16)慶瀬 誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房、1984 年）
- (17)慶瀬 誠『立山のいぶき一万葉集から近代登山事始めまで』（シー・エー・ピー、1992 年）
- (18)福江 充「立山衆徒の勧進活動と立山曼荼羅」（『山岳修験』第 20 号所収、1997 年）
- (19)佐伯泰正「昭和の芦瞬寺宿坊においての体験記」（同上）
- (20)福江 充『立山信仰と立山曼荼羅ー芦瞬寺衆徒の勧進活動ー』（岩田書院、1998 年）

芦瞬寺衆徒の廻檀配札活動に関する古文書を解説・活字化して収めた基本史料集には次のものがある。

- (21)木倉豊信編『越中立山古文書』（立山開発鉄道株式会社、1962 年）
- (22)廣瀬 誠編『越中立山古記録』第一巻（立山開発鉄道株式会社、1989 年）
- (23)高瀬 保編『越中立山古記録』第二巻（立山開発鉄道株式会社、1990 年）
- (24)廣瀬 誠編『越中立山古記録』第三巻（立山開発鉄道株式会社、1991 年）
- (25)高瀬 保編『越中立山古記録』第四巻（立山開発鉄道株式会社、1992 年）

立山衆徒が頒布した護符に関する著書や論文、図録には次のものがある

- (26)高瀬重雄『越中の絵図』（巧玄出版、1975 年）
- (27)高瀬重雄「立山信仰の護符について」（『立山信仰の歴史と文化』所収、名著出版、1981 年）
- (28)高達奈緒美『越中立山における血盆経信仰』Ⅰ（富山県〔立山博物館〕、1992 年）
- (29)高達奈緒美『越中立山における血盆経信仰』Ⅱ（富山県〔立山博物館〕、1993 年）
- (30)高達奈緒美、米原寛・木本秀樹・福江充『立山信仰ー祈りと願い』（富山県〔立山博物館〕、1994 年）
- (31)福江 充「立山山麓芦峯寺の宿坊家と護符ー加賀藩に対する諸祈祷や諸国での廻檀配札活動で使用された護符ー」（『立山信仰と立山曼荼羅ー芦峯寺衆徒の勧進活動』所収、岩田書院、1998 年）
- (32)嶋本隆一・福江充・坂森幹浩『立山登山案内図と立山カルデラ第 5 回企画展』（立山カルデラ砂防博物館、2000 年）
- (33)福江 充「立山信仰と刷り物」（『とやま版越中版画から現代の版表現まで資料集』所収、富山県民会館美術館、2000 年）

富山売薬と立山信仰（特に立山衆徒の廻檀配札活動）との関係について言及した著書や論文には主に次のものがある。

- (33)梅原隆章「富山売薬由緒書批判」(『越中史壇』第4号所収、1955年)
- (34)梅原隆章「越中売薬と立山信仰」(『越中史壇』第6号所収、1955年)
- (35)長嶋喜一郎「諸国配札檀那廻りと越中配置薬との関連性について」(富山県教育委員会、1969年)
- (36)坂井誠一「富山売薬業の起源に関する一考察―修験売薬とのかかわりにおいて―」(『富山史壇』第56号、第57号合併号所収、1973年)
- (37)根井 浄「修験者の医療について」(『印度学仏教学研究』第24巻2号所収、日本印度学仏教学会、1976年)
- (38)寺口けい子「芦峯寺善道坊諸国檀那廻りの実態」(『富山史壇』第67号所収、1977年)
- (39)米原 寛『先用後利―とやまの薬のルーツと(北日本新聞社、1979年)
- (40)坂井誠一「修験売薬より御城下売薬へ」(『富山県史』通史編VI 近世下 所収、富山県、1983年)
- (41)道正 弘「富山売薬伝説に関する由緒書について」(『富山史壇』第82号所収、1983年)
- (42)道正 弘「越中加賀領売薬」(『富山史壇』第83号所収、1984年)
- (43)道正 弘「富山売薬と修験道」(『富山史壇』第85号所収、1984年)
- (44)『富山県薬業史通史』(富山県、一 1987年)
- (45)根井 浄「富山売薬に関する覚書」(『地方史研究』第47巻第5号〈通巻269号〉所収、1997年)

次に、配札活動の研究は次のように分けられる。

- (1)「立山信仰の定義」
- (2)「寺院と衆徒(芦峯寺・岩峯寺)」
- (3)「檀那場と宿坊家・師檀関係を結ぶ信徒など」

これらの諸要素のうち、従来の立山信仰史研究の分野において、(1)と(2)については早い時期から多くの研究者や公的機関が注目し、かなりの研究成果が見られる。ただし(2)に関する問題として、情報の発信者である芦峯寺衆徒や岩峯寺衆徒の立山での活動実態については、ある程度研究されている。一方で、布教先での活動については2000年を前後に立山曼荼羅が複数発見されたことにより、福江氏を中心として検討がなされている。さらに(3)は、寺口けい子氏が芦峯寺衆徒による三河国の檀那廻りを論文として発表している。寺口氏は檀那帳用いての研究をしており、そこに薬を売る配置薬の関連性についても指摘している。2002年に福江氏著の『近世立山信仰の展開』には尾張国について出版された2002年までの研究がまとめられている¹。

こうした状況に対し、前記の(1)と(2)の部分的な研究成果だけでは、本当の意味で立山信仰を理解・解明したことにはならないと考える。衆徒の布教活動によって日本国内各

¹ 参考文献リストを参照

地に伝播したとされる立山信仰は、各伝播先において芦峯寺一山会で規定されたルールに即して勧進布教を行ったものと考えられる。しかし、時には衆徒の思惑をはずれ当地の様々な影響を受けて微妙に変化させて柔軟に対応したものもあるのだと推測できる。また、伝え手が宿坊家の人間ではなく立山講の人間であった場合には布教の内容にも変化は必ず現れるはずである。立山信仰の語りの一つの代表例として、芦峯寺宿坊家の絵解き時に用いられる立山曼荼羅において描かれている布橋灌頂会もこの変容という名の需要によって生み出された作られた儀式であると発表者は考えている。

[3]慶長9年日光坊断簡文書

慶長9年6月 三河・尾張・美濃における檀那場争いにつき申渡書

(前欠)

(よこすか)

(里)

(まはせカ)

■■■■か村

大さと村

■■■■村

■■■■れ七村

(横須賀)

(馬走瀬)

(羽根)

(日長)

(大野)

■■■■村

はね村

ひなか村

おうの村

(かし)

(常滑)

(阿野)

(枳豆志)

■■■■や村

とこなへ四村

あの村

きすす七村

(鍛冶屋)

(村木)

むらき村

三川之国

■■■■き村

ちい分村

いも河村

おハリ

■■■■り山

とききやうたひ

ミのの国

(関)

(生櫛)

(笠神)

せき村

いくし村

かさかミ村

其外所々

ミのハ日光坊ノ分

(こ)

(破損)

■れを与十郎あらそひかへ■ことくしきてらのけんほう

あつかひにてすみ申候間、其分ミなく心へ可申候、此

聞てたしかに小熊相渡申候也

慶長九年

日光坊

六月十日

重(花押)

この文書を見てもわかるように慶長9年には日光坊は尾張国や三河国、美濃国にその規模そのものは不明であるが檀那場を形成し保有していたことがわかる。

ある宿坊家がひとたび条件の良い檀那場の形成に成功すると、その宿坊家の檀那場の維持に全力を尽くし縄張りができる。例えば、既にある檀那場に新規の宿坊家が参入しようとする時、条件の良い地域は既に先行の宿坊家におさえられているので、なかなか思うように進出していくことができない。それゆえ、ときに他の宿坊家の檀那場と知りながら、支配圏を侵してしまい、争いになることもあったといえよう。

しかし、芦峯寺宿坊家間の廻檀配札活動は全て一山の管理下にあり、万一争いが生じた際には、芦峯寺一山の衆評によりの確な判断が下され、檀那場を一山が引き揚げ、規約に基づいて改めて正しく配分するかたちをとっている。それが信仰圏を超えれば奉行所を通じて争論に発展することもあったのであろう。

慶長9年の日光坊文書も同じように題名が「三河・尾張・美濃における檀那場争いにつき申渡し書」であったことから何らかの争いがあったことが推察されるが、欠損部分が多いこともあり、これについて言及している研究者はいない。しかし、文書の後半部を見ると「ミのハ日光坊ノ分」と記載がある。これは欠損部分があるものの、尾張国、三河国、美濃国ときて美濃国は日光坊の分とあるのは美濃国の檀那場をめぐる争乱していたということが言えるだろう。この文書から2つのことがわかる。まず、日光坊が尾張国、三河国についてはもめた形跡が見られない。しかし、美濃国については争乱があった可能性があり、日光坊の檀那場であると規定されたことがわかる。

16世紀中頃から17世紀前半までの知多郡からの富士山登拝者のまとめた表が山形隆司氏の論に掲載されている。これを見ると慶長9年に知多郡大野村において大力坊が同行13人を連れて興法寺大鏡坊（静岡県）に宿泊していることがわかる²。これを見る限りこの時には既に立山芦峯寺日光坊と富士山御師の檀那場がかぶっていることがわかる。つまりこの慶長9年に檀那場をめぐる争いがあったとされる日光坊文書は三禅定とのかかわりはわからないものの少なくとも富士と立山との間で檀那場の争いがあったとは言えないのであろうと発表者は考える。むしろこの状態から推測できることとして、檀那場を共有し中部地方をめぐる三禅定の信仰圏を築いていたと考えるべきであろう。福江氏も日光坊が尾張国内で近世後期には確実に檀那場を形成し毎年農閑期に檀那場へ赴き、立山信仰を布教しながら護符や経帷子、小間物などを渡していたことが明らかであると主張する³。

[4]まとめ

本発表では愛知県における立山信仰を信仰史研究という観点から一考察を行った。愛知

² 16・17世紀の尾張国知多郡の富士信仰-富士山登拝と浅間社の勧請- 山形隆司

³ 芦峯寺宿坊家の尾張国檀那場と三禅定（富士山・立山・白山）関係史料 福江充
富山県[立山博物館]研究紀要 第17号 2010年3月

県の特に尾張国に関する研究が一番進んでいることを提示したい。慶長9年以前から日光坊によって愛知県を檀那場とすることを示す史料があり、檀那帳などの基本史料を扱った文献史学をメインに福江氏が研究を行い比較的近年ではあるが、急速に研究が進展したことは疑いようのないものである。中でもこれまで慶長9年日光坊文書では檀那場の存在だけが論じられてきたが、美濃では争いがあり尾張三河では争乱がなかったもしくは、既に日光坊の取り分であるということが分かった。また、富士信仰の研究の成果と合わせるとほぼ間違いなく、尾張三河は立山信仰と富士信仰の檀那場がかぶっており、争いが起きていなかったこともわかる。尾張国の檀那場や同地での活動について言及されることは比較的多かったにもかかわらず、意外にも檀那帳や日記帳などの基本史料の調査・分析によって檀那場の実態について検討しようとする試みは少ない。停滞気味とともとれる研究動向に対して、津田豊彦氏は発表者が愛知県における立山信仰を史料的調査する上で必要不可欠な論文を出している。発表者は史料ベース以外にも思想・宗教的な側面からもアプローチできるかもしれないと考えているが、それはまた別の機会に考えたい。

参考文献

廻檀配札活動をメインとする参考文献

日和祐樹「立山信仰と勧進」（高瀬重雄編『山岳宗教史研究叢書10 白山・立山と北陸修験道』所収、名著出版、1977年9月）。

『立山町史 上巻』（立山町編・刊行、1977年10月）。

寺口けい子「芦峯寺善道坊諸国檀那廻りの実態」（『富山史壇 第67号』所収、越中史壇会編、1977年12月）。

福江充「江戸時代幕末期 芦峯寺宿坊家間の檀那場をめぐる争いについて」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第5号』所収、富山県〔立山博物館〕、1998年3月）。

福江充『立山信仰と立山曼荼羅—芦峯寺衆徒の勧進活動—（日本宗教民俗叢書4）』（岩田書院、1998年4月）。

福江充「立山信仰にみる石仏寄進の一例—江戸の信徒による姥堂境内六地藏尊石像の寄進」（『宗教民俗研究 第8号』所収、日本宗教民俗学研究会、1998年6月）。

福江充「芦峯寺衆徒の宗教活動」（『とやま民俗文化誌（とやまライブラリー6）』所収、富山民俗文化研究グループ編、シー・エー・ピー、1998年8月）。

福江充「芦峯寺宿坊家の廻檀配札活動とその収益の行方」（『富山市日本海文化研究所報 第21号』所収、富山市日本海文化研究所、1998年9月）。

福江充「立山山麓芦峯寺宿坊の檀那帳に見る立山信仰—立山信仰の伝播者芦峯寺衆徒の廻檀配札活動と檀那場」（『情報と物流の日本史—地域間交流の視点から—』所収、地方史研究協議会編、雄山閣出版、1998年10月）。

福江充「幕末期江戸の立山信仰—芦峯寺宝泉坊の江戸の檀那場と廻檀配札活動の実態—」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第6号』所収、富山県〔立山博物館〕、1999年3月）。

福江充「木版立山登山案内図（芦峯寺系）の施主について」（『立山登山案内図と立山カルデラ 第5回企画展解説図録』所収、立山カルデラ砂防博物館、2000年7月）。

福江充「立山信仰と刷り物」（『とやま版 越中版画から現代の版表現まで 資料集』所収、(財)富山県文化振興財団富山県民会館美術館、2000年10月）。

福江充「江戸時代中期における江戸の立山信仰—江戸時代中期に芦峯寺衆徒が江戸で形成した檀那場について—」（『富山史壇 第133号』所収、越中史壇会編、2000年12月）。

福江充「信濃国の立山信仰」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第8号』所収、富山県〔立山博物館〕、2001年3月）。

福江充『近世立山信仰の展開—加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札—（近世史研究叢書7）』（岩田書院、2002年5月）。

福江充「富士山・立山・白山の三山禅定と芦峯寺宿坊家の檀那場形成過程」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第10号』所収、富山県〔立山博物館〕、2003年3月）。

福江充「芦峯寺日光坊の姥堂別当及び布橋大灌頂法会開催に関わる勧進活動 日光坊所蔵の立山御姥尊別当奉加勧進記（弘化3年）を中心に」（『富山市日本海文化研究所紀要 19号』所収、2005年10月）。

福江充「越中立山芦峯寺の由緒書・縁起・勧進記と木版立山登山案内図・立山曼荼羅」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第19号』所収、富山県〔立山博物館〕、2012年3月）。

福江充「三嶽神社(岐阜市福富)と三禅定：芦峯寺日光坊の尾張国での檀那場形成を踏まえて」（富山史壇 / 越中史壇会 編 (188) 71-79 2019年3月）

福江充「立山衆徒が求めた加賀藩の外の権威」（北陸大学紀要 54号 165-192 2023年3月31日）

福江充「立山信仰を受容した信濃国の人々—特に立山芦峯寺教蔵坊との関係において—」（北陸大学紀要 56号 79-105 2024年3月31日）